

神奈川文芸賞 [2022]

現代詩部門：準大賞

氷川丸／牛久保夏帆

山下公園に足を運ぶ
夏の日差しがわたしの顔を照らす
目の前には青い海
どこまでもどこまでも続く
あの水平線に向こうには何があるのかな
そんなことを思いながら、ぼんやりとする
ふと、わたしは一隻の船が目に残った
迫りある大きさ
赤と白の煙突
あれは氷川丸だ
中に入ってみよう
ここは本当に日本なのか
高い天井やアール・デコの装飾
まるで異国の地にいるようだ
年季が入った古い扉や階段
ダンスパーティーをした社交室
今まで大切に扱われてきたのだろう
長い歴史が刻み込まれている
古いからこそ美しいものがあるのだ
こつこつものこつものかな
本当に美しいと思いはせる
目を閉じれば、浮かぶ
人々の姿が
耳を澄ませば、聞こえる
人々の笑い声
今から九十年ほど前
氷川丸は人生で一番かがやいていた
でも、それは永遠にはつづかない

その期待もむなし、男性タレント一行は次のヌナックへと移動した。
奥能登という場所に互いの人生の接点を持ったことは、やはり「運命」というような言葉で説明されるのではない。そんな自信がはたいて、二人は写真を送り合うことを承した。だが、正方形の画角に収まった孝爾の顔が送られてきた際には、意外にも反応に困る場面があった。かねてからの予想を止む下にも振れることがなかったからとでもいえるが、実際には、まだ二人の間を漂っていた「チャット・チェンバー」に由来する匿名性の残滓が、孝爾の祖母の登場によって完全に消滅していったからであり、もはや孝爾の実在を疑う余地がなかったことが大きかった。しかし同時に、いくつもの山脈と都市と無数の田舎町が二人を隔てているという事実が、以前より現実味を増しているように、玲香は考えるようになった。

玲香が孝爾と出会うためには、おそらくは中学と高校を卒業して、関東の大学に進学する必要があった。それ以外の案は思いつかなかったし抽出しようともしなかったが、大学に入って、孝爾と一緒に暮らす生活を考えることがあった。二人でスーパーに行き、二人で携帯ゲームをして、二人でお風呂に入って……。その細部をインターネットで読んだ同人小説や同人漫画などから引用した、継ぎ接ぎの妄想として思い浮かべた——もちろん玲香に恋愛経験はないし、彼女の現実と同様するカプルのモデルケースなど存在しないからだ。いずれにせよ、孝爾と出会う瞬間は、最遅でも四年後まで先延ばしにされること分かっていった。

「そういえば家族に玲香の話を話したんだよね」「孝爾が言った。数えてみれば五回目となる電話のことだった。」
「え……。なんて言ったの？」
「戸惑いを隠せなかった玲香の言葉に、孝爾はこんな方便を考えた、自慢気に説明した。学校の交流活動で奥能登から中学生がやってくる、その時に玲香という女子と親密になり、メールアドレスも交換して、今では何度も電話をしている。ほう、半島の端っこの港町同士、姉妹みたいな制度があるらしいよ、いい子だったし、ばあちゃんが曾々木に暮らしていたことを話したらすごく興味持って聞いてくれた。……」
「それで、うちからお蔵書を贈ろうって話になって、住所教えてほしいんだけど」
困惑してしばらく話を続けなかったが、「嫌だった」という孝爾の言葉にまたか逃れ難いような含みを感じて、何度か「わざわざ大丈夫、悪い」と伝えたものの、結局押し切られて住所を吐いた。喉に重たいものが詰まったように、玲香は愚痴になった。なぜ苦しい思いをしているのか、玲香にはうまく整理できなかったが、とにかくこの家に贈り物が届くのなら、家族に説明する理由を探さなければならない。三崎にきた頃にもよく心に思い浮かべ

ていました。ですが、娘が生まれ、孫が生まれた今では滅多に振り返ることがありません。孝爾から玲香さんのことを聞いて、久しぶりに奥能登の里山での日々を懐かしんでいる今日この頃です。
せつかく紙に余りがあるのですから、玲香さんの疑問にお答えいたします。どうしてわたしが曾々木から三崎に来たのか、その経緯を知りたがっている孝爾から頼まれるのですが、どうも孫に話すのもためらわれて、なあなあにしてしまったもので、すからこれを機に直接お伝えすることにします。あまり長くなりませんが心がけますので。
まずわたしが里を出て赤坂に移ったのは、生家の民宿に遊びにきた、とあるお客が就職を取り次いでくれるといい、中学卒業からほとんどすべてに住まいも仕事も東京に用意してくれたからでした。都会へのおこがれで胸いっぱいだったわたしは、「お酌をするだけ」という言葉をよく考えもせず、とにかく東京で暮らせるのなら、飛び出すように里を離れた。その仕事というのが、料理屋で男の方のお相手をするので、芸者ともいいますが、今考えてみれば、屋敷の中で過ごすばかりで、まるで東京の文化に触れたこととはありませんでした。身につけた芸だっただけかなのです。それから一年や二年経って国の言葉がすいぶん抜けてきた頃になって、わたしを東京へ連れ出したオナーナから「赤坂はもう駄目だ。三崎という漁師町があるからそこに行け」と告げられたのです。時勢も変わったのでしょう。東京での稼業はもうできないというのです。めったやたらに半人前だと教えられたわたしは、これを機に仕事を探さずとも、言われるがまま、はるか見知らぬ土地で「お酌をする」ことになりました。

当時、三崎の町は赤坂と同じか、それ以上に潤っていたかも知れません。船が帰ってくる日には、たくさんのお客やスナックの客が岸壁に立ってお客を待ちました。船乗りは一年も二年もお金を使わずに、男ばかりで海の上でいたのですから、出迎えるのは皆、女でした。船が出港する前夜の宴会にもわたしは呼ばれ、当日の朝また賑わい出されて、軍艦マーチや歌謡曲が流れる岸壁で、わざとらしくすりり泣いたりしました。とにかく尋常じゃないお金の使い方をする男たちを中心に、町が動いていた時代です。その頃、まだ十歳かそこらのわたしはお客だった船乗りと結婚して、「水揚げ」なんて言われながらも「いやな言葉だと思いませんか、お店を用意してもらいました。それから、わたしが身ごもると彼はまた航海に出て、そのまま帰ってきませんでした。」「必ず帰る」と言ったあの船乗りは、寄港先で姿を消したのだと同じです。
玲香さんが疑問に思っただらしたとはいえず、突然このような身の上話をされて、とてつもなく迷惑なことかと存じます。正直に申し上げますと、初めて同郷の友人に手紙を書くような、少しばかり浮ついたところがあることを告いだした。なんせ屋敷にいた頃は手紙も電話も禁じられ、気づいたら独り親になって忙しなくてはたいていたのですから、故郷との縁が絶えてしまっただけです。図々しいようですが、同郷のあなたに、もし、わたしのような老人に構う暇があれば、これから申し上げることを聞いていただきたいと思います。いらぬお節介りな態度でよく判っているつもりですが、賢俊な玲香さんであれば、

（理解いただけるのではないかと、筆を走らせている次第です。学校では成績優秀である孝爾から伺っておりませう。）
先日、夜九時になっても誰一人来客のない閑散とした日があり、どうせ地元のよく知った人しか来ないようなお店です。一時間もしたら閉めようと考えていると、一人の若い男性が入ってきました。初めて会うお客でしたが、話してみると孝爾の学校の先生だと判り、よりによってクラスの担任だということに驚きました。それで孝爾くんは成績はまずまずだとか、素行もよいと褒めてくださった。ついつい嬉しくなりましたが、ふと思いついて、そういえば奥能登の中学との交流授業があったぞうですね、と聞いてみたのです。すると、はて、といった調子で、全然そんな覚えはないと仰るのです。港町の姉妹が、そりゃいいですねと感心すべからされたわたしは慌てて、覚え違いだっただけですと訂正いたしました。
今の時代なら、このような古臭い手紙なんて使わずとも、能登と三浦の二人が出会うことだであるでしょう。わたしの娘もなにかの雑誌の投稿で知り合った人を三崎に連れてきたことがあったのですから、いまさらそれにおこらたりめいりするつもりはありません。なにがあったって二人の関係が、人と人のつながりを外からほぐすことはできませんし、そうするつもりもありません。でも、孫になにか企んで嘘をついたらなになんてほしいないし、祖母ながら情けなくなりました。実際のところ二人がどのように出会ったのか、追及しておりませぬ。わたしは、言葉は切符のようなものだ、いつからか考えるようになりました。電車で乗るのに切符が要るように、とどこへ行くたいから、あなたの人生に乗せてくださいと、切符代わりに言葉をお交わすのが世間というものです。奥能登では、人と人が血で結ばれていますが、わたしの身寄りの金もないう人間が目まぐるしく往来する世の中では、言葉だけが人と人の縁を取り持つことができませぬ。それが判った頃には、何人も単独な乗客が、わたしの人生に立ち入っていました。お酌をするだけと言ったオナーナも、必ず帰ると言った船乗りも、言葉に嘘を織り交せて、わたしにいちぎの切符を握ませたのでした。
もちろん孝爾のことは厳しく叱りました。よくよく反省したのか、すいぶん気を落としていました。娘からそんなことで怒らなくてもいいとわたしは認めましたが、誰かを大切に思うのなら、すべてから誠実に生きなければならぬというのには、平凡なわたしの人生から取り出せる、ただ一つの真実のようなものです。どうにも厚かましうすですが、あなたのことからこの人生、偽物の切符で傷つけようとなことだけでなく、三崎の老人が祈っていることごとくでも、判っただけだと幸いしてござります。
あなたへの同郷の友人という思いががりの親愛と、与太話をする孫の祖母という情けなさとがもつれ合ったまま、長く見苦しい手紙となってしまいましたが、お許しください。できればお返事ならば、今後とも孝爾とは仲良くしてやってください。また嘘をつくものならこつこつと説教するつもりです。どうか玲香さんが健やかに過ごされますように。敬具。

二月二〇日
石黒玲香さま
加藤明子

講評 蜂飼耳

横浜港の水川丸は、航海の記憶と歴史を超えて、いま静かに停泊している。もう遠くの外へ旅に出ることはないが、訪れる人々に過去の経験を伝えている。作者は夏のある日、実際に水川丸に乗ったのだろう。船内を実況中継するように進む叙述と想像が重なって、好奇心で視野が広がるときの感慨を伝える。やや散文的だが、ういういしがある。詩になった後、この感慨はどこへ進むか。十代の作者の航海は始まったばかりだろう。

講評 朝井リョウ

既にとんでもない数の物語が世の中に存在しているという事実は、書かれていない感情などもうないのではないかと、という恐怖に繋がります。何を書いてもありふれた内容になってしまうのではという不安が、書き手には常に宿ります。ただ、どのような人物が誰にどんな状況でどんな言葉で伝えるのか、そこを工夫することで、たとえそれが過去に何度も書かれてきたような感情だったとしても、読み手への印象は様変わりします。私はそれこそが小説の持つ一

つの力だと考えており、その力を最も感じた候補作がこちらでした。この小説では、後半、言葉を切符に例えるシーンが出てきます。その表現で描写されているメッセージは、もしかしられば既に書かれたことがある内容かもしれませんが、私の脳にはそのメッセージがまるでおまじないのように深く深く刻まれました。今後の人生で何度も思い出すことになるでしょう。小説の心臓となる一行の大切さを再認識した作品でした。

作品掲載に当たっては、原文通りを原則としていますが、入賞作品は順次掲載します。
次回10日の予定